

令和 7 年 5 月 15 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2024

課題番号：21K02555

研究課題名（和文）義務教育期間をつなぐ造形活動メソッドを造形要素の観点から開発する

研究課題名（英文）Developing a creative activity method to bridge the compulsory education period from the perspective of creative elements

研究代表者

松久 公嗣（Matsuhisa, Koji）

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：00380379

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：Reggio Emilia Approachの要素を組み込んだ日本版の「アトリエ」の環境整備を進めながら、連携する保育園・こども園・小学校・中学校での実践を基に共通する造形の要素を抽出し、そのつながりをまとめた。保育園やこども園で、造形の要素のつながりを意識した活動や研修を設定することで、新任教員を中心とした実践力向上が見られた。Reggio Emiliaとの国際交流展を両国で開催し、現地視察やアトリエリストとの協議も行った。中学校では新たな造形題材を開発し、小・中学校教員向けの研修にも展開している。これらの実践を通して、一貫した造形教育モデルと人材育成の基盤を構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、Reggio Emilia Approachの理念と実践を参考に、教員の専門性に左右されず活用できる「造形要素」という共通キーワードを抽出し、造形活動の分析や事例化に応用したものである。これにより、地域や学校園を問わず、教員同士が活動を共通理解し、相互に連携できる基盤が形成される。

研究成果は、幼児期から中学校への教育の接続を視野に、日常の活動を共通言語で振り返り、指導計画に活かす実践的な支援となる。さらに、領域横断的な教育連携の先事例として、全国の連携事業への貢献も期待される。

本研究は、幼児教育から小中学校への架橋を目指し、地域課題の解決と協働体制の構築に寄与するものである。

研究成果の概要（英文）：We promoted the creation of a Japanese version of the atelier environment that incorporates elements of the Reggio Emilia approach, and extracted common design elements and organized their connections based on the practices of partner nurseries, kindergartens, elementary schools, and junior high schools. At nurseries and kindergartens, we aimed to improve the practical skills of newly hired teachers in particular by providing activities and training that focused on the connections between design elements. We held international exchange exhibitions with Reggio Emilia in both countries, and also conducted on-site inspections and discussions with Atelierista. At junior high schools, we developed new lesson themes and expanded them to training for elementary and junior high school teachers. Through these practices, a consistent design education model and a foundation for human resource development have been established.

研究分野：造形活動、美術教育

キーワード：Reggio Emilia Approach 造形要素 表現領域 図画工作 美術 造形活動 芸術

1. 研究開始当初の背景

幼児教育における造形活動の重要性は高く、保育環境に造形活動を中心とした活動を位置付ける著書や実践も多い。しかし、保幼小さらには中学校の義務教育全体をつなぐ視点で造形活動を見通す研究や、連携体制、カリキュラム作成を試みる例は見当たらない。各地の保幼小連携でも、組織づくりを中心とした制度設計で止まり、表現活動から教科につながるカリキュラムに着目した実践例は皆無であった。

学校園の文化や指導方法の差が大きく変化する接続期において、接続期のつながりを重視した教育施策の重要性が高まっている。保育所・幼稚園と小学校・中学校は、それぞれが独自の教育観を持っており、教員もそれぞれ違った指導方法をとる。また、小中連携に関しては「現職教員の多忙化と負担感の増加」に関わる課題は、その後の先導的な取組においても解決されることなく、“最も大きな課題”として示されており、具体的な解決策を見いだせないまま制度化が進んでいることから、その形骸化が懸念される。

これらのことから、接続期に特化した方策とは別に幼児期から中学校までの義務教育期間全体を見通した教育の連続性・一貫性を調和させるカリキュラムを具体的な活動や教科につながる視点から構築し、保幼小中の連携を直接的・具体的に支援する方策の必要性を強く認識した。

そこで、各学校園の教員が専門性の高低に関係なく共通して理解を深めることのできる共通言語や共通する活動を探り、それらの内容をキーワードとして領域や教科の活動を分析してまとめなおすことで、各学校園の教員がより身近な活動を振り返りながら共通理解と相互理解を深めたいと考えた。

2. 研究の目的

幼児期の表現領域から図画工作科、美術科の教科につながる学びを“造形活動”と定義したうえで、幼児期から義務教育の期間全体を見通した造形活動について、学校園の各教員が相互理解を深めるために必要となるガイドブックと具体的な活動のつながりを共有できるデータベースを作成し、相互理解に基づいて機能する協働体制の構築を図る。

本研究ではイタリアの Reggio Emilia Approach の保育実践を参考に、形や色、材質や組み合わせといった“造形要素”に関連するキーワードを抽出して学校園の造形活動を分析し、ガイドブックとデータベースを作成したのち、過去の小中一貫教育に係るカリキュラム開発の成果と融合することで義務教育期間を見通した“造形活動メソッド”の完成を目指す。

3. 研究の方法

データベースは研究期間終了後も更新できる方法を確立し、ガイドブックについては以下の手順と客観的な評価を用いて改善し完成度を高める。

保幼小の造形活動に共通する造形要素を抽出し、造形要素の観点から造形活動を分析したうえで造形要素の理解につながる活動を協力量学校園において実践する。学校園の教員らと協働して活動し、その内容をアクションリサーチの手法で検証する。

小学校図画工作科における教科書題材を造形要素の観点から分析するとともに、類似する Reggio Emilia Approach の実践と比較・分類してまとめなおす。まとめた内容について、協力量学校園の教員らの理解度を深める改善を繰り返す。

ガイドブックは原案となるものをまとめ、免許更新講習や教育センターの研修会において広く活用する。ガイドブック原案の内容は、各学校園における実践時と各講習会・研修会で実践した際に参加した各教員らのアンケート調査で評価を受けて改善を図る。

4. 研究成果

保幼小の造形活動に共通する造形要素のうち、連携するこども園・保育園での実践を基に、造形要素ならびに造形に関わるキーワードを抽出した。

こども園においては、「レジジョ活動」と題して行う造形活動において、ドキュメンテーションづくりと振り返りミーティングにおける発表内容から、保育者らの共通理解を深める造形要素や造形に係るキーワードを 550 語程度抽出し分類した。

保育園においては、アトリエ施設の設置に関わり、Reggio Emilia Approach における「アトリエ」と「レミダ」の機能を備えた建屋の完成を目指した。内装を手掛ける前に、職員とその子どもを対象としたワークショップを開催し、建屋の形状に即した内装の在り方を検討する材料とした。「アトリエ」にあたる機能は完成し、ワークショップで使用するなかでより適した内装の改善を繰り返している。「レミダ」にあたる機能は、保育園の近隣にある企業・工場を中心に廃材提供を呼びかけて充実を図った。

また、保育園の現任教諭を対象とした造形活動に係る実技研修会を担当し、廃材を用いた造形活動例の紹介や、廃材を使った造形活動の指導・助言を行った。この研修会はコロナ対策を兼ねて遠隔で実施した。小学校だけでなく幼児教育においても、Wi-Fi環境が整備され、タブレット端末やスマホを用いた子どもや各家庭との連絡・交流方法が充実する傾向にある。この遠隔研修会の成果を基に、研究室の機器や研修方法を充実させた。これにより、研究の継続性を維持するだけでなく未来の造形教育を想定した試行も開始することができた。

小学校図画工作科における教科書題材を造形要素の観点から分析するとともに、類似する Reggio Emilia Approach の実践と比較・分類してまとめなおすために、中止していたイタリアとの交流作品展を 2022 年に開催した。

当初の計画に沿って、Reggio Emilia との交流作品展を中心にイタリア側 STAFF との協議を重ね、現地調査で得た知見を加えて、日伊に共通する造形要素等の抽出を完成させたのち、ガイドブック作成に向けた基礎資料の作成を行った。

連携体制にあるこども園と保育園では、造形活動の継続を通して、さらにキーワードなどの抽出を行い、ガイドブックの精度を高めることができるように取捨選択と分類を進めた。また、イタリアとの連携やこども園の英語教育等にも関連して、抽出したキーワードや造形要素の英訳を進め、当初計画に新たな課題を設定することで、世界共通で認識できるガイドブックの作成を視野に入れた。

抽出したキーワードやその分類については、連携するこども園や保育園に加え、大学近郊の小学校図工研究部会にも協力を要請して、事業終了後も、学校園の現場の教員が理解し共有出来る内容として充実を図る。

特に保育園での「レミダ」機能を有した「アトリエ」環境が想定以上に充実し、卒園者や近隣の親子を対象としたワークショップによって、より充実した環境整備を進めている。

こども園にも同様の環境が整備できないか、予算面と敷地等の条件について保育園の前例を参考に検討を始めた。こども園においては、新任または経験年数の浅い教員の造形活動に関する実践スキルの向上が特筆に値する。「レジジョ活動」として定期的を実施する中で、経験者やアトリエリスタと協働するチーム作りが機能している。ミーティングにおける各教員の発言内容や支援に関する言葉かけについても、造形要素を交えた交流が顕著で、分かりやすい造形要素を繰り返し使用して解説したり、活動やドキュメンテーションづくりの各場面で実践的に活用している効果といえる。

Reggio Emilia との交流作品展は、イタリア展と日本展を口語開催する形を復活し、まず 2022 年 12 月 17 日～2023 年 1 月 9 日に開催した。また、これまでの交流成果をまとめた展覧会を 2023 年 5 月に Reggio Emilia の Centro Internazionale Loris Malaguzzi において開催した。

これに合わせて Reggio Emilia での現地調査等を 2023 年度に変更したが、より多くの関係者との協議を計画することができるようになった。また、連携保育園のアトリエリスタもこの展覧会と「レジジョ・ナラ」の現地企画における研修と重ねて Reggio Emilia を訪問し理解を深めた。

想定外の効果や連携が達成できていることから、計画当初のメソッドの内容を修正して、各園の特徴やチーム（組織）作りに関する項目も追加して作成を試みた。

小学校へのつながりについて図画工作科に関する活動を中心に造形要素のつながりを確認しつつ、各地域の現職教員研修会においても、造形要素の観点から解説を加え意見を求めた。

保幼小の造形活動については、連携する保育園ではアトリエ空間の充実とワークショップの開催を継続し、ワークショップ内容の拡充を図ることができている。特にアトリエには無い自然環境を近隣の森に設定し、森のワークショップという形で、アトリエとは異なった活動を展開している。森のワークショップでは、楽しく活動する子どもたちに対して、引率する保護者等の活動を想定していなかったことから、場に存在する素材の一つとして「苔」に着目して、即興的な「苔玉作り」を試行し、今後の活動の一つとして提案した。

これがきっかけとなって、2024 年度には「苔玉作り」ワークショップを、海の道むなかた館、附属幼稚園、森のワークショップで実践した。中学校までのつながりに止まらず、保護者や一般社会人まで活動に巻き込むことで、親子の関係性や生涯学習を見据えた造形活動として可能性を感じるものとなった。

事業期間終了後も、苔が自生する環境以外でも定期的にワークショップが実施できるように、苔の栽培と、苔玉作りの主役となる植物の栽培について、本研究課題の発展的課題として展開している。

連携こども園では保育者の入れ替わりが大きかったこともあり、レジジョ活動の内容を柔軟に設置しなおすなど一部想定外の修正を加えながらこれまでの活動を継続している。小学校との連携体制の構築が難しいが、Centro Internazionale Loris Malaguzzi 内に設けられた小学校の様子を専属のアトリエリスタの案内で視察することができたので、その内容と日本の小学校の差異を比較する材料は入手することができた。現職教員を対象としたスキルアップ講座で、本研究の成果を反映した実技課題の指導を依頼されており、これらの機会を通して社会への還

元を行っている。

Centro Internazionale Loris Malaguzzi での展覧会は盛況で、センター長や他のアトリエリスタ、小学校の教育関係者らと展覧会の内容や今後の連携に関する協議を終え、継続課題と新規課題について連携体制を維持することが決まった。

連携保育園内のアトリエは、「アトリエ・イハナ」と名称を改め、将来的に独立採算での運営を目指すことを提案した。本事業では、人材配置や人材育成に関して助言と実践の機会を提供し支援を行った。その結果、事業終了後もアトリエ環境の充実と活動の拡大が期待される。本事業終了後も人材育成やアトリエの改善に関わりながら支援を継続する予定である。また、活動拡大の一環として、県外の教育施設でのワークショップを企画し実施した。この取り組みにより、アトリエリスタの企画力や指導力の向上を図ることができた。その成果は学会でも発表して高い評価を得た。

連携こども園では、すでに年間2~4回程度の参観と助言により造形活動を計画・実施するカリキュラムが確立している。事業終了後もこの支援体制を継続することで、園長と合意している。

小学校での実践は実現できなかったものの、本事業の研究成果をもとに、小学校教員を対象とした研修会を実施した。幼児教育の実践と小学校の活動をつなげて俯瞰することの出来る特別な機会となり、現職教員や教育センターから高く評価され、今年度の教育センターの研修会として、小学校版と中学校版の研修会を依頼されている。

中学校では、連携校の1年生の授業で新たな題材を開発・実践した。4クラスのうち1クラスでは、導入段階を研究者が担当し、現職教員との違いを確認しながら、より良い授業づくりを協働で検討した。この題材は現在も継続して使用されており、教員の教育力向上にも寄与したと考えられる。この題材は、幼児期から義務教育（小・中学校）をつなぐ活動の中核として位置づけ、連携保育園や大学の授業課題としても実践した。制作された227点の作品は、2025年2月13日からの日本展、および5月12日からのイタリア展（Reggio Emilia市との交流作品展）に展示予定であり、今後、展覧会を通して得た客観的な評価をまとめる予定である

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松久公嗣
2. 発表標題 Reggio Emilia Approachを 融合した造形活動と アトリエ空間の試行
3. 学会等名 第62回 大学美術教育学会「香川大会」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松久公嗣
2. 発表標題 子どもとともに指導者も学ぶ造形ワークショップの創造
3. 学会等名 第63回 大学美術教育学会「金沢大会」
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	レベリーニ ルチア (LEVRINI LUCIA)	ガリレオ・ガリレイ小学校(イタリア)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

イタリア	STITUTO COMPRENSIVO "GALILEO GALILEI"			
------	---------------------------------------	--	--	--